
ヘタ鬼 ~トリップ!!皆で脱出しようね。~

翠風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタ鬼 〜トリップ〜！皆で脱出しようね。〜

【Nコード】

N8761Y

【作者名】

翠風

【あらすじ】

『液晶退けええー！！』

【ヘタ鬼】の動画を見ていた二人の少女、黒羽とホワイト。二人は【ヘタ鬼】の世界にトリップして、皆を助けたいと望んでいた。そんな彼女達の前に突然、彼くが現れる。彼くは彼女達に「皆を助けて欲しい。」と頼み、二人はその頼み事を引き受ける。

『大丈夫。』

『安心して下さい。私達が輪廻を終わらせませす。』

『僕達に任せてよ。もう、巻き戻させたりしないからさ。』

果たして、イレギュラーである二人の少女は、歪んだ空間から皆を救い出すことができるのか？

プロローグ く『液晶、そこを退け!!』く

日本のどこかの家

パソコンの画面を食い入るように見つめる二人の少女がいた。どうやら、何かの動画を見ているようだ。

?? 『……………うわあああ————ん!!……!!』

液晶退けえええ————!! (泣) 『』

?? 『!?!? (ビクッ) 『』

突然、黒髪の少女がパソコンに向かって叫び始めた。
いきなりのことに隣に座っている白髪の少女は驚き、ビクリと大きく肩を震わせた。

?? 『ちょ、ちょっとホワイト、気持ちは分かるけど落ち着いて…。』

?? 『黒羽……。だって…だって————!! (泣) 『』

白髪の少女…黒羽は黒髪の少女…ホワイト・フェザーことホワイト

トを宥めるが、ホワイトは尚も泣き叫んだ。

ホワイト『僕の力を使えばトニーもどきを倒せるかもしれないのに……』
『わああー！ やっぱり液晶退けえー！ 皆を助けるんだー！』(泣)

黒羽『私も同じ気持ちだよ。皆さんを助けられるなら助けたい……』

そう言うのと黒羽は視線をパソコンの画面へと戻し、とても哀しそうな顔をした。

ホワイトも一旦泣き止み、黒羽の視線をたどって視線をパソコンの画面に戻し……

ホワイト『うわああー！ん！』

また泣き始めた。

黒羽『……………グスッ。』

さっきまで我慢していた黒羽もつられて泣き始めてしまった。

現在、黒羽とホワイトは【ヘタ鬼】の動画を見ている。

黒羽『……でも、ホワイトの言う通り液晶が退いてくれたら良いのにね。』

黒羽はポツリと呟いた。　すると…

??「…助……やって…ね。」

二人『!?!?!?』

どこからともなく、声が聞こえてきた。

黒羽『…今、何か聞こえた?』

ホワイト『黒羽にも聞こえた?……ってことは僕の気のせいじゃないんだね…。でも、一体どこから?』

??「…ここだ…。」

二人『!?!?!?!?!?』

二人で首をひねっていると、また声が聞こえてきた。

そして二人は声のする方…パソコンの方に顔を向けた。　するとそ

ここは…

黒羽『えっ！？…君は……』

ホワイト『神聖ローマ！？！？』

パソコンの画面に映っていたのは【ヘタリア】の登場人物で、消えてしまったはずの少年…神聖ローマだった。

黒羽『どうして神聖ローマ君がここに？』

黒羽はパソコンの画面に神聖ローマが現れたことに驚きながらも、至って落ち着いた口調で聞いた。

神聖ローマ「…お前達に頼みがある。」

ホワイト『…なあに？』

いつもと違い、真剣な表情をするホワイト。黒羽も神聖ローマをじっと見つめる。

神聖ローマ「…イタリアを…皆を…助けてやって欲しいんだ。」

二人『いい(です)よ。』

神聖ローマ「!？」

あまりにも返事が速かったので、神聖ローマ驚いていた。

神聖ローマ「本当にいいのか？」

ホワイト『だって僕達、皆を助けたいんだもん。ね、黒羽？』

黒羽『うん。それにさっきその話をしたばかりだし…というか、神聖ローマ君は私達がイタリアさん達を助けたいって話をしたから来てくれたんでしょ？』

神聖ローマ「…ああ、そうだ。」

黒羽の言葉に神聖ローマは少し苦い顔をしながら頷いた。

ホワイト『じゃあ、早速行く(黒羽) あっ!』

黒羽は何かを思い出したように大きな声を出し、俯いた。

ホワイト『どうしたの！？黒羽！！』

黒羽『いや、その…。』

ホワイト『？』

黒羽『私…戦えるかな？』

ホワイト『あ…。』

ホワイトも『そう言えば』と、困ったような表情をした。

黒羽『ホワイトは魔法を使えるし、戦いにも慣れてるけど、私は…。』

神聖ローマ『それなら、問題無い。』

黒羽『えっ…。』

神聖ローマ『俺が力をやる。そうすれば、お前も（黒羽『黒羽。』）？』

黒羽『私のことは黒羽、って呼んでいいよ。（ニコッ）』

ホワイト『僕はホワイト、でいいよ。（ニイッ）』

神聖ローマ『／／／分かった。…話を戻すぞ。俺が力をやれば、黒羽も魔法を使えるようになるし、武器なんかを使って戦えるよう

にもなる。」

黒羽『へえ…ありがとう。神聖ローマ君は凄いなだね。』

神聖ローマ『いや、別に…。それに礼を言うのは俺の方だ。こんな無茶苦茶な願いを聞いてくれて…本当にありがとう。』

神聖ローマはペコリと頭を下げた。

二人（／＼／＼かわいい…。）

見たことのない神聖ローマの行動に二人は小さく感動していた。

ホワイト『ねえねえ、神聖ローマ？』

神聖ローマ『？何だ、ホワイト。』

ホワイト『神聖ローマは僕が何なのか知ってるの？』

神聖ローマ『…知ってる。』

ホワイト『ふん…そっか ならいいや』

黒羽『ホワイト…。』

少し、沈黙が続く。

神聖ローマ「…では、お前達二人を【あの館】へ送るぞ！」

黒羽『うん。』

ホワイト『よしてきた！』

黒羽『ホワイト…それ、漁師さん達が使う言葉…。』
（汗）

ホワイト『えへへ…』

神聖ローマ「……link……offnen……!!」

神聖ローマが何か呪文のような言葉を呟くと、パソコンの画面からまばゆい程の光が溢れだし、黒羽とホワイトを包んだ。

そして、光が収まる頃には二人の姿は消えていた。

神聖ローマ「…頼んだぞ、二人とも。」

パソコンの画面はブツツと音を立てて、消えてしまった。

主達を無くした家は静寂に包まれるのだった。

設定（前書き）

主人公達の設定です。なんかもう、無茶苦茶な感じですね
…。

設定

設定

名前：千晶^{ちあき} 黒羽^{くろは}「母方」

> 黒羽・C・オブシディエン<「父方」

容姿：白い髪に緋色の瞳の少女。髪は肩にギリギリ届くくらいの長さ。

普段は年齢よりも大人びて見えるが、笑うと年齢より幼く見える。可愛い。ホワイト・フェザーと同じ顔をしている。

服装

- ・白のトレンチコート（丈短め）
- ・黒のショートパンツ
- ・白のブーツ
- ・ブレスレット（水晶を抱く黒い竜の形）
- ・胸元に紅い大きなリボン

身長：161.7cm

年齢：16歳（高校1年生）

性格：優しい。落ち着いた雰囲気を持っている。真面目。

1人称：私

その他：話すときは基本、敬語。

ホワイト・フェザーを「ホワイト」と呼んでいる。友

達に薦められて【ヘタリア】を知り、ハマった。それから【ヘタ鬼】

の動画も薦められて見て、みんなを助けたいと思っていた。

頭が良く、スポーツもそこそこできる。

一軒家にホワイトと一緒に暮らしている。家族は皆、他界している。

母親は日本人（黒髪に黒い瞳）、父親はアメリカ人（金髪に瑠璃色の瞳）だった。瞳の色は父方の祖母から遺伝した。昔は黒髪だったが、ある事件くをきっかけにショックを受け、白くなってしまった。

名前：ホワイト・フェザー

容姿：黒い髪に瑠璃色の瞳の少女。髪は長く、ハンガリーくらいの長さ。人間ではないらしく、トリップ前の世界では透けていた。だが、トリップ後は実体を持っている。

可愛い。黒羽と同じ顔をしている。

服装

- ・黒のケープ
- ・深緑のショートパンツ
- ・白のハイソックス（長さは膝上）
- ・深緑のブーティー
- ・ブレスレット（水晶を抱く白い竜の形）

・首もとに紅い小さなリボン

身長：161.9cm

年齢：???

性格：明るい。常にテンションが高い。よくふざける。自分の思っていることははっきり言うタイプ。

1人称：僕。たまに私。

その他：誰に対してもタメ口で話す。

黒羽と一緒に【ヘタリア】や【ヘタ鬼】を見て、自分もハマった。

「ホワイト・フェザー」という名前は黒羽が付けてくれたと言っている。魔法を使える。また、戦いの経験があるらしく戦える。強い。

設定（後書き）

次は第一話です。

【あの屋敷】に到着します。

第一話 【あの館】へ到着（前書き）

予告通り、【あの館】に到着します。
内容はタイトル通りです。

第一話 【あの館】へ到着

黒羽『……ん……ここは……？』

神聖ローマ「起きたか？」

黒羽『……神聖ローマ君……？……！？何処にいるの！？』

黒羽は神聖ローマの声がすぐ近くから聞こえたので、てっきり隣にでも居ると思っていた。だが、近くに神聖ローマの姿は無かった。

神聖ローマ「右手のブレスレットを見る。」

黒羽『えっ？う、うん。』

黒羽は神聖ローマの指示通り右手に付けたブレスレットを見た。

黒羽『……あ……！？』

ブレスレットを見ると、水晶の部分に神聖ローマの姿があった。

神聖ローマ「俺は普段はで黒羽とホワイトのブレスレットの水晶の中で二人のことを見守っている。だが、必要なときには力を貸そう。」

黒羽『うん。…その言い方からすると、神聖ローマ君は私達のプレスレットを自由に行き来できるの?』

神聖ローマ「ああ…。」

黒羽の問いに、水晶の中で神聖ローマは頷いた。

ホワイト『…うん…!…!…!』

先程まで気を失っていたホワイトもようやく目を覚ました。

黒羽『おはよう、ホワイト。』

ホワイト『うん!おはよう、黒羽…!…!』

神聖ローマ「3階の図書室だ。」

ホワイト『へへ、本当に【あの館】に来たんだね…!…!…!て、えっ!?
?神聖ローマど!…!』

黒羽『ホワイト、左手のプレスレットを見て。』

ホワイト『へっ?う、うん。』

ホワイトは黒羽の促すままに左手に付けたブレスレットを見た。

ホワイト『…あっ！？神聖ローマ！！！何で水晶の中に居るの！？』

神聖ローマはいつの間にか、黒羽のブレスレットからホワイトのブレスレットに移動していた。

神聖ローマ「俺は黒羽とホワイトのブレスレットの中を自由に行き来できる。」

ホワイト『へえー！！すげー！！』

神聖ローマ「／／いや、それほどでもない。」

ストレートにほめられ、神聖ローマは少し照れた。

黒羽『……………』

黒羽は二人のやり取りを横目に見ながら、何かをしていた。

ホワイト『…それじゃ早速トニーもどき退治にしゅっぱーっ！…！』

黒羽『お、おおー…？』

ホワイト『さ、神聖ローマも』

神聖ローマ『あ、ああ…おおー……。』

ホワイト『もー！！二人とも元気ないな！。』

二人の元気のない「おおー」にホワイトは頬を膨らませた。

黒羽『ごめん、なんかこういうの慣れなくて…。』

神聖ローマ『…俺もだ…。』

性格が真面目な二人組は苦笑いしながら答えた。

ホワイト『全く…二人とも各自練習しておくように！』

黒羽『は、はい。』

神聖ローマ『わ、分かった。』

ホワイト『よろしいじゃ、行くよ〜。』

そして3人は図書室を後にするのだった。

廊下

ホワイト『そう言えばさー、黒羽…。』

黒羽『？』

廊下を移動中、ホワイトが黒羽に話し掛けてきた。

ホワイト『黒羽、戦えるの？魔法の練習とかしなくて大丈夫？』

黒羽は【この館】にトリップする前はただの女子高生だった。神聖ローマから力を貰ったとはいえ、まだ使ったことはな…

黒羽『大丈夫 さっき練習したし、戦い方も頭の中に入ってるから。』

くも無かった。

ホワイト『いつの間にも!?!』

黒羽『大体は夢の中。あとはホワイトが神聖ローマ君と話してるときに。』

ホワイト『夢の中?』

黒羽『そうだよ。(ニコッ)』

不思議そうな顔をするホワイトに黒羽は笑いかけた。

神聖ローマ『...ということは上手く行ったってことか。』

ホワイト『へ?』

今度は神聖ローマの言葉にホワイトは不思議そうな顔をした。

神聖ローマ『俺が「眠っている間に訓練ができる空間」を黒羽の頭の中に作ったんだ。なんなら、ホワイトにも作ってやろうか?』

ホワイト『うん!!作って作って!!』

黒羽『私の頭の中に戦い方を入れてくれたのも神聖ローマ君だよ』

？
『

神聖ローマ「そうだ。」

ホワイト「神聖ローマすげー！……よし、僕も頑張るぞ
』

ホワイトは両手をグーにして、上に掲げた。

神聖ローマ「……すまないが、力を使いすぎて疲れたから俺は少し休むぞ……。」

黒羽「あつ、うん。ゆっくり休んでね。」

ホワイト「お休み〜
』

神聖ローマ「……。」

黒羽「……眠ったみたいだね。」

ホワイト「だね。」

黒羽とホワイトは顔を見合わせて、笑った。

ギャーーーーー!!!
ウワーーーーー!!!

二人『!!!!』

1階の玄関に続く階段へ向かっていると、下から悲鳴が聞こえてきた。

黒羽『ホワイト!!』

ホワイト『うん!!!!』

二人は悲鳴のした方へ急いだ。

イタリア side

俺「ハアツ…ハアツ…」

今、俺は「あいつ」から逃げている。

俺「…!!全く…!しつこいなあ…!。」

周りには俺以外、誰も居ない。
俺は立ち止まり武器を構えた。

俺「…来るんなら来れば?。」

そう言うと、あいつは凄い速さで俺に向かって来た。
俺はあいつの攻撃に備え、武器を強く握りしめた。すると…

??『ていやー!ー!』

キンッ

俺「!?!?。」

突然、後ろから槍を持った黒髪の女の子が現れてあいつに斬りかかった。

俺「えっ…えっ…!？」

??『うわ…思ってた以上にかたっ!なら…これでどつだ!』

混乱する俺をよそに、その子は槍を(どつという仕組みかは分からないけど)大剣に変えて、再びあいつに斬りかかった。

ザクッ

??『おっ!いけたいけた』

トニー(?)「グギャー」

あいつは少し怯んだ。

??『大丈夫ですか?茶髪のお兄さん。』

俺「えっ!？」

気が付くと、俺の隣にはさっきの子にそっくりな顔をした白髪の女の子がいた。

??『ここは私達に任せて逃げて下さい。』

俺「き、君達は一体…どうして…ここに…何で…。」

俺が聞くとその子は困ったような顔をして、答えた。

??『今はまだ言えません。…でも1つだけ言えるのは…』

私達はあなた方の味方です。』

その子は一旦言葉を切り、俺の目をまっすぐ見つめ、とても優しい笑顔で言った。

俺「どういうこと？俺達の味方って？君達の名前は？どうやってここに来たの？ねえ！！」

??『…すみませんが強行手段に出させて頂きます…』

彼の者を我が意のままに…メニューバー！』

その子が呪文を唱えると、俺はの意思とは反対に走り出し、その場から離れ始めた。

俺「！？何これ！？体が勝手に！？」

??『私の魔法ですよー！』

後ろを振り返るとあの子が叫んでいた。

俺「待って!!まだ聞きたいことが…。」

あの子達の姿がどんどん小さくなっていく。そして、俺の体は廊下を曲がり遂に見えなくなってしまうた。

三人称 s i d e

黒羽『行ったね。』

ホワイト『うん。』

二人は顔を見合わせ、イタリアが向かった方向を見ながら呟いた。

二人『大丈夫。』

黒羽『安心して下さい。私達が輪廻を終わらせます。』

ホワイト『僕達に任せてよ もう、巻き戻させたりしないからさ』

トニー(?)『ニガ、サ…ない……。』

黒羽『別に逃げませんよ。』

ホワイト『むしろ、そっちが逃げないでよね』

黒羽は魔導書を、ホワイトは大剣を構えた。

二人の口元には笑みが浮かんでいた。

第一話 【あの館】へ到着（後書き）

第二話は、明日投稿の予定です。

主人公達がトニーもどきと戦います。

閑話 神聖ローマがくれた力について（前書き）

すみません。初めての戦いの前に閑話を入れさせて頂きます。

ホワイトが黒羽に神聖ローマからどんな力を貰ったか質問する話です。

閑話 神聖ローマがくれた力について

イタリアとトニー(?)に遭遇する前のこと…

ホワイト『ねえねえ、黒羽。』

黒羽『?何?ホワイト。』

ホワイト『黒羽はどういう風に戦うの?』

ホワイトは黒羽から、黒羽は神聖ローマから力を貰い戦えるようになったとは聞いたが、具体的にどう戦えるようになったかは聞いてなかったことを思い出し、黒羽に質問した。

黒羽『あ…そう言えばまだ説明して無かったね。』

そう言つと黒羽は懐から紙とペンを取りだし、サラサラと何かを書き始めた。

黒羽『…っと。私の戦い方を簡単にまとめると、こんな感じだよ。』

黒羽は先程何かを書いた紙をホワイトに見せてきた。

ホワイト『どれどれ…』

ホワイトは紙を覗き込んだ。紙には、次のように書かれていた。

- ・戦い方はそのときの「ジョブ」によって異なる。
- ・「ジョブ」とは職業のことである。
- ・「ジョブ」は一度に2つ、掛け持つことができる。
- ・2つの「ジョブ」の組み合わせにより、新たな「スキル」を使えるようになる。
- ・「スキル」とはジョブ毎に使える特別な技である。
- ・ジョブは「ジョブチェンジ」という魔法で自由に換えられる。
- ・「ジョブチェンジ」だけは、どの職業のときでも使える。

ホワイト『…なるほどね』

ホワイトは黒羽の書いた紙を読み、理解したようだった。

ホワイト『それで黒羽は今、何と何のジョブを掛け持ちしてるの？』

黒羽『私が今掛け持ちしてるのはウィザード（魔導士）とディーバ（歌姫）だよ』

ホワイト『ディーバ？』

黒羽『ディーバっていうのは、名前通り【歌声】で戦うんだよ。戦

い以外にも、回復や仲間のサポートも出来るんだって。』

ホワイト『わあ……で、他にはどんなジョブがあるの?』

黒羽『そうだね……ソードナイト（剣士）やパラディン（聖騎士）、プリースト（僧侶）、アーチャー（弓手）なんかもあるよ。』

ホワイト『へー……なら、その場に応じて戦えるんだね。』

黒羽『うん。……ってそれはホワイトも同じでしょう?魔法使えるし、武器も自由に出して使いこなせるし。』

ホワイト『ま〜ねえ〜』

ホワイトは黒羽の言葉に胸を張って答えた。

ホワイト『けど、やっぱり僕は武器で戦うのに慣れてるから、黒羽には魔法で援護して貰っていいかな?』

黒羽『いいよ。……というか、今の私のジョブじゃ援護しかできないから（汗）』

ホワイト『んじゃ、よろしく』

ホワイトは右手をグーにし、親指を上立てニカッと笑いながら黒羽に向けた。

ギャー——！！
ウワー——！！

二人『！！』

1階の玄関に続く階段へ向かっていると、下から悲鳴が聞こえてきた。

黒羽『ホワイト！』

ホワイト『うん！！』

そして二人は悲鳴のした方へ急ぐのだった。

閑話 神聖ローマがくれた力について（後書き）

次こそ、初めての戦いです。

第二話 初めての戦い（前書き）

二人がトニーもどきと戦います。ゲーム（テイルズシリーズ）の技が出てきます。

戦闘描写って難しいです…。

第二話 初めての戦い

ホワイト『さーてとつ、久々に暴れますか』

大剣を構えて、ホワイトは楽しそうに言った。

黒羽『初めての戦い…ちょっと緊張するな…』

これが初めての戦いである黒羽は真剣な表情で手にある魔導書を見た。

ホワイト『お先に失礼』

ホワイトは早速、トニー(?)に向かって駆け出し大剣を振り下ろした。

ホワイト『ヤアッ!』

サッ

しかしトニー(?)はそれをいとも簡単に避け

トニー「…コワレロ…。」

ホワイトに攻撃を仕掛けてきた。

黒羽『危ない！ホワイト！』

聖なる光の障壁よ、我が仲間を護り給え…バリアー！！』

黒羽が呪文を唱えると、ホワイトの周りに蒼く透き通った大きなクリスタルのようなものが現れ、トニー（？）の攻撃を防いだ。

黒羽『大丈夫！？ホワイト？』

ホワイト『お陰様で ナイス援護だよ、黒羽。』

黒羽『良かった…。（ホッ）』

ホワイトの無事を確認でき、黒羽は安堵の溜め息をついた。

ホワイト『あいつ、結構速いね……どうにか動きを止められればいいんだけどな…。』

黒羽『……！ねえ、ホワイト。』

ホワイト『ん？なあに〜？。』

ホワイトの言葉に一瞬考え込む顔をした黒羽が、何か思い付いた顔をしてホワイトに話し掛けてきた。

黒羽『あいつの動きを止める術を使いたいから、少しの間、時間を稼いで貰えないかな？』

ホワイト『OK！任せてよ』

そう言うとホワイトは大剣をレイピアに変えて、トニー(?)に斬りかかりに行き、黒羽は詠唱の準備を始めた。

黒羽『……………戻って！ホワイト。』

トニー(?)からの攻撃にレイピアで応戦していたホワイトは、黒羽の声に反応し、黒羽の隣まで一気に跳んで戻ってきた。

黒羽『聖なる裁き、天より降り注げ…ホーリーランス!!』

黒羽が詠唱を終えると、何本もの光の槍が現れ、トニー(?)に降り注いだ。

トニー（？）「グキヤーーーーー!!」

トニー（？）は光の槍に串刺しにされ、動けなくなった。また、痛みに悲鳴を上げた。

黒羽『ホワイト！止めを!!』

ホワイト『了解！行くよー!!』

ホワイトはレイピアを再び大剣に変えた。

ホワイト『月影斬!!』

ホワイトは大剣の先端が三日月の弧を描くように大きく振り回し、トニー（？）の額を狙った。

トニー（？）『グキヤアーーーーー!!』

技は見事に命中し、トニー（？）は断末魔の悲鳴を上げ、倒れた。

ホワイト『よっしゃー!』

ホワイトは念のためトニー（？）から離れた。だが、トニー（？）は動かなかった。

なので、黒羽とホワイトは警戒しながらトニー（？）に近づいた。

黒羽『私達…やったの？』

ホワイト『うん。』

黒羽『トニー（？）を倒したの？』

ホワイト『そうだよ』

黒羽『……………ったー…。』

ホワイト『黒羽？』

黒羽『やったー！ー！ー！』

黒羽は普段からは考えられないようなあどけない笑顔を見せ、ホワイトに抱き付いてきた。

ホワイト『おっと。』

ホワイトは思わず倒れそうになったが、何とか耐えた。

黒羽『やったー、やったー、やったー!!』

ホワイト『ちよっと黒羽、落ち着いて。(汗』

見たことのない黒羽の行動に戸惑うホワイト。

ホワイト『あ…!?!トニー(?)が!?!』

黒羽『えっ!?!』

ホワイトの言葉に黒羽はようやく離れる。

トニー(?)は二人の目の前でゆっくりと透けて行き、そして…

黒羽『…消えたね。』

ホワイト『…消えちゃったね。』

…消えてしまった。

黒羽『………………。』

ホワイト『………………。』

黒羽『…でも………………。』

ホワイト『ん？』

黒羽はホワイトの方を見て微笑んだ。

黒羽『倒せて本当に良かった…。』

ホワイト『初めての戦いにしては上出来だったよ、黒羽。』

黒羽『ありがとう。』

ホワイト『よし、この調子でバンバントニー（？）を倒して皆を助けるぞ〜』

黒羽『ふふ…そうだね。頑張ろっか。』

二人は自分の武器を持ってない方の手をグーにして、コッソリと相手の拳とぶつけた。

こうして二人は初めての戦いに勝利し、又、志を新たにすのだった。

第二話 初めての戦い（後書き）

駄文ですみません。

評価や感想を貰えると嬉しいです。

第三話 休憩。そして作戦会議（前書き）

タイトルとは内容が少し違つかもしれません。

第三話 休憩。そして作戦会議

ホワイト『ふう〜。疲れた〜。』

黒羽『私も…。』

イタリアとの接触後、黒羽とホワイトはまた何体かのトニー(?)と戦い、休憩のため、4階のレバーがある部屋に来ていた。

ホワイト『黒羽もだいぶ戦い慣れてきたね。』

黒羽『うん。ワイザードとディーバはもう、ほぼ使いこなせるようになったと思うよ。あ…ホワイト、怪我してる。ちょっと見せて。』

ホワイトの右肩にはトニー(?)に引っ搔かれたときにできたのであろう切り傷があった。

ホワイト『ん?いや、これくらい平気だよ。』

黒羽『ダメ、見せなさい。』

ホワイト『むー…はい。』

ホワイトは渋々傷を黒羽に見せた。

黒羽『……………癒しの光、今ここに集え…ヒール!』

黒羽が呪文を詠唱すると傷口にかざした手から淡い黄色の光が溢れ、ホワイトの傷はみるみる治っていった。

黒羽『…はい!おしまい。もう動いていいよ。』

ホワイト『ありがとう ……なんかもう本当に極めたね、黒羽。』

黒羽『いや、極めたってほどではないよ…。』

戦いのほとんどで黒羽はウィザードとディーバの状態でしたので、その2つについては極めていた。

ホワイト『ディーバでこっそりイタちゃん達のサポートしたり、ウィザードの回復呪文で怪我治してあげたりもできてたしね』

黒羽『はは……(苦笑)、けどあれ絶対怪しまれてたよ。』

ホワイト『まあ…仕方ない仕方ない。』

二人は姿こそイタリア以外に見られはしてないが(イタリアに見られたのも最初の接触だけだが)、ディーバの時は歌声を聴かれ、

ウィザードの時は（癒しの）光を見られてしまっていた。

ホワイト『それで今は何になってるんだっけ？』

最後の戦いときはトニー（？）が2体同時に出てきたので、二人はそれぞれ1体ずつと戦っていた。そのためホワイトは黒羽が今、何と何を掛け持ちしており、どういう風に戦ったのか知らなかった。

黒羽『今はね…ウィザードとソードナイトを掛け持ちしてて、マジックナイト（魔法騎士）で戦ってるよ。』

ホワイト『ふーん…じゃあほぼ僕と同じ戦い方してるってことか。』

黒羽『そうだね。』

ホワイト『……………。』

黒羽『……………。』

黒羽とホワイトは沈黙しながら、これまでのことを振り返っていた。

ホワイト『……………これからのことについても話し合おう。』

黒羽『そうだね。じゃあまず……………。』

それから二人はこれからのことについて話し合い、その後、休憩していた。

15分(?)後

黒羽『!…ホワイト、私達がイタリアさんと会ってから結構時間が経ったよね?』

黒羽は突然、何かを思い出したようにホワイトに話し掛けた。

ホワイト『うん、そうだね。でもそれがどうかした?黒羽。』

黒羽『だとしたら、もうすぐあのイベントが起こるかも…。』

ホワイト『あのイベント?あ…。』

ホワイトは黒羽の言う【あのイベント】が何か一瞬分からなかったが、すぐに思い付き声を上げた。

黒羽『早く行かないとプロイセンさんとフランスさん、アメリカさんが危ないかも。』

ホワイト『急ごう！』

黒羽『分かってる。さあ、ホワイト。』

黒羽はホワイトに左手を差し伸べ、ホワイトはその手を取った。

黒羽『行くよ…』

光よ、我らを導き運び給え…テレポーターション！』

黒羽とホワイトは淡紫色の光に包まれ、姿を消した。

2階

フォン……

ホワイト『とうちゃっく』（小声『

黒羽『成功したみたいだね。』（小声『

二人は黒羽の魔法で2階の階段の傍に着いた。

ホワイト『…あっ！！フラ兄見つ（黒羽『しーっ！（ガバツ』もごもご。』

ホワイトはフランスが丁度廊下を曲がるのを見て声を上げ、黒羽は咄嗟にホワイトの口を塞いだ。

ホワイト『ムグ…ぶはー！黒羽、今のつて！』

黒羽『フランスさん…だったね。』

ホワイト『んじゃ、早速作戦決行だね 健闘を祈る！』

ホワイトは黒羽の方を向き、右手で敬礼をした。

黒羽『了解。そっちもね！』

黒羽も口元に笑みを浮かべながらホワイトに敬礼（右手）を返した。

ホワイト『メリカとロツ様とカナちゃんは任せて』

黒羽『私もプロイセンさんとフランスさんのこと、護るよ。』

そうして二人はお互いの武器をクロスさせるようにして一度、カシヤンとぶつめた。

黒羽は魔力の籠った大剣を両手で持つてフランスの後を追い、ホワイトは柄に雷の紋章が入った刀を片手に1階へと階段を駆け降りるのだった。

第三話 休憩。そして作戦会議（後書き）

次話は、連合+カナダが館に来る話の予定です。

感想お願いします> | | | <

第四話 連合国＋カナダ、館に到着（前書き）

連合国＋カナダが館に来ます。

黒羽・ホワイトは全く出てきません。
動画を文章にしただけの話です。

第四話 連合国＋カナダ、館に到着

館の入り口

【ある館】の入り口に連合国＋カナダが集まっていた。

中国「本当にこんな所あったあるか！」

中国が目の前の館を見て、声をあげる。

イギリス「噂だと思っていたんだが…あるもんだな。」

イギリスも館を見て、「同感だ」とでも言うように呟いた。

フランス「この寂れた感じが、雰囲気あっていいんじゃない？」

カナダ「僕はあんまり気乗りがしないんだけど…。」

カナダは少しおどおどしながら言った。のだが…

アメリカ「？今なんか声がしなかったかい？」

ロシア「またまたアメリカ君たら〜！何にも聞こえないじゃない〜
！」

幻聴と思われてしまった。

カナダ「……………」。

黙りこむカナダ。

アメリカ「それにしても……………なんかあまり楽しそうな場所ではなさ
そうだね。」

アメリカはどうにも嫌な雰囲気を放つ館を見て不安そうに言った。

イギリス「……………」。

イギリスは黙って館を見つめた。

ロシア「まあちょっと見て帰ればいいんじゃない？夕方前には出ら
れると思うんだ。」

中国「そうあるな。我もあんまり長居したくねえある！」

ロシアはいつも通り楽しそうに笑い、中国もそれに同意した。

フランス「んじゃ、取りあえず入ってみるか。」

ガチャツ、ギイイ…

扉は鈍い音を発てながらゆっくりと開いた。

そして連合+カナダは館へと足を踏み入れるのだった。

玄関

ロシア「お化けが出るって噂があるんだよね。だから誰も近寄らな

い……。」

館に入り、ロシアはアメリカとカナダの前で口を開いた。

アメリカ「確かに。なんだか薄気味悪い所なんだぞ。」

カナダ「あれ？珍しいねアメリカ。怖いのか？」

普段なら人前では怖がらないアメリカの言葉を不思議に思ったカナダがアメリカに声を掛ける。

アメリカ「違うよ！でもなんか………あれ？中国達がないじゃないか。」

玄関にいるのが自分達だけなのにようやく気付いたアメリカ。

ロシア「えーとね。1階は任せたって言って、さっさと2階に行っちゃったみたい。」

アメリカの疑問にロシアはニコニコと笑いながら答えた。

アメリカ「フーン。じゃあ俺達は……。」

バタンッ

大きな黒い影……トーン(?)がかなりの速さで三人、否アメリカへ迫っていった。

2階

フランス「中は思ったより綺麗なんじゃないの？」

イギリス・フランス・中国は2階に来ていた。

イギリス「そ、そうだけどよ…。なあ、帰らないか？」

いつも強気なイギリスは珍しく弱気だった。

フランス「なんだよイギリス。怖いのか？」

そんなイギリスをフランスがからかう。

イギリス「ちつちげえよばか！！そうじゃなくて、なんかここ……。」

即座にイギリスはフランスに対抗した。だが、その顔はやはり不安そうで威勢がない。

中国「はあ。全く馬鹿馬鹿しいある。お化けなんか。いるはずねえ

ある。とつとと帰るよろし。」

中国は二人に呆れながら冷静に言い、奥の部屋に向かおうと1人歩き出した。

フランス「おいおい。一人で見て回るのか？」

中国「その部屋を覗いてみるだけある。少し異臭がするあるよ。」

フランスに話し掛けられ、中国はある部屋の前で立ち止まった。
…少々顔を歪めながら。

フランス「え。それマズくないか？ちょ、待てって！」

イギリスとフランスも中国を追って異臭のする部屋の前に来た。

フランス「なーんかここ、嫌な感じがしてたまらないっつーか……。
本当に出そうだな。こりゃ。」

イギリス「……………」

無言になるイギリス。

フランス「お前さつきからだんまりだけどどうしたのよ？いつもみたいに変なのでもいた？」

フランスが威勢の無いイギリスを不審に思い、話し掛けた。

イギリス「……………。いねえんだ。何も。」

中国「ロシアとかその他は1階にいるあるよ。」

イギリスの言葉に中国は「何を言っているんだ？」とでも言いたそうな口調で答えた。

イギリス「いや、そりゃ分かってるけどよ。ここ、そういうのが全くいねえっつーか…なんつったらいいのか、そう言つのも含めて全部、何もかも食われたって…感じが…」

イギリスは少し言いづらそうにしながらも、自分の感じていることを素直にフランスと中国に伝えた。

フランス「いつもの幻覚が見えないってことか？幻覚すら食われた空間ってことなら早々に引き上げるべきかもな。」

中国「その意見には同意ある。なら、我はさらに上の階を見てくるある。あへんはどうするある？」

中国もフランスの意見に賛成し、これからどうするかイギリスに聞いた。

イギリス「この階はあまり居たくねえ。俺も上の階に行くぜ。」

どうやらイギリスも中国と共に上の階を見て回ることにしたようだ。

フランス「あら。お兄さん一人？じゃあ、上の階調べてきたら、またここで落ち合つてことで。」

中国「了解ある。じゃ、2階は任せたあるよ。」

イギリス「30分もありや十分だろ。寝てんなよ。フランス」

フランス「任せなさいって。じゃ、また後でな。」

話はまとまりフランスは2階、イギリス&中国は上の階を見て回る事になった。

フランスは異臭のする部屋から離れ、どこかへ歩き始めた。

中国「フランスはあっちの部屋から見て回るあるか。」

フランス「そ〜。その部屋やばそうなんだろう？そんなの後後！」

そのままフランスは探索を始めた

イギリス「早く行こうぜ。アメリカを待たせると色々づるさそうだ。」

中国「お前顔色悪いあるな。こことの相性最悪そうある。」

中国はイギリスにそう言うと、イギリスを置いて上の階へと続く階段に向かった。

イギリス「……………これほど「見えない」ことを羨ましいと思うとはな…。」

ぼそつ、とイギリスは呟いた。

中国「何か言ったあるか？聞こえなかったあへん。」

中国には聞こえなかったようだ。

イギリス「なんでもねえ。」

イギリスと中国は上の階へと上がって行った。

第四話 連合国＋カナダ、館に到着（後書き）

次話はイギリス&中国が館内を探索する話の予定です。

感想や評価、お願いします！！

第五話 イギリスと中国へ探索へ（前書き）

イギリスと中国が3階・4階の部屋を見て回る話です。

ホワイトが少しだけ出てきます。

第五話 イギリスと中国へ探索へ

3階

3階に着いたイギリスと中国は、まず一番階段に近い部屋から探索を始めた。

ガチャッ

ドアを開けるとそこには数え切れない程の本が本棚に仕舞われていた。

イギリス「すっげー本の数だな。日本の方が詳しくそうだ。」

本を見てイギリスは世界会議の会場に残してきた友人、日本を思い出した。

中国「……はあ。日本と一緒に回りたかったある。」

イギリス「俺だってお前よか日本の方がいいぜ。そういえば日本から返事は来たか？」

中国は弟である日本と一緒に良かったと言い、イギリスも日本と一緒に良かったと言いつ返した。

それから、日本から返信が来たか尋ねた。

中国「返事？ああ、メール送ったやつあるか。さっき見たら、圏外だったある。」

イギリス「あ、俺もだ。電波悪いのか……。日本も来たがってたら大変だな。早く出ようぜ。」

イギリスと中国、どちらのケータイも館内では圏外になっていた。

中国「日本が来たがるとは思えねえある……。」

イギリスと中国は図書室をでて、3階にあるもう一つの部屋へと向かった。

ガチャッ

部屋の真ん中には1台の真っ白なピアノがあった。また、部屋全体が異様な程、白く塗り潰されていた。

イギリス「なんか気になるな。この部屋。」

部屋の中にはピアノと棚が4つあるだけだった。

3階には特に変なものなかったので、イギリスと中国は4階へと上がった。

4階

二人は階段傍の部屋を先に調べ始めた。

ガチャッ

部屋には

- ・ベッド
- ・ソファ
- ・テーブル
- ・カーペット
- ・クローゼット
- ・タンス
- ・レバー

があった。

イギリスはレバーの横の壁に貼ってある怪しい紙を読んだ。

イギリス「なにになに？

「上は天国。真ん中は地上。下は地獄。」

か。」

紙には不可解な言葉が記されていた。

イギリス「下手に動かさねえほうがいいな。」

何が起こるか分からないので、イギリスはレバーを放置することにした。

二人はもう一つの部屋へ来た。

ガチャッ

今度の部屋には
・テーブル

- ・イス
- ・棚
- ・タンス
- ・怪しげな赤い椅子
があつた。

イギリス「お！これは！」

イギリスは怪しげな赤い椅子を見て、少し嬉しそうな声を出した。

中国「趣味の悪い椅子あるな。どこの呪われた椅子みたいある。」

イギリス「……………」

黙るイギリス。

イギリス「で、結局4階まで来ちまったけど…………別に普通だったな。空気は最悪だが。」

中国「まだ嫌な予感は消えてねえある。フランスと合流してとつと帰るよろし！」

中国も気分が悪くなる程では無いが、嫌な感じはしていたらしい。

イギリス「だな。んじゃ、とつと……………」

バンッ

パパパン パパパン パパパン

下から銃声が響いた。

イギリス「この音…」

中国「アメリカの拳銃の音あるか？あいつ発砲しすぎある。」

イギリスと中国は慣れているのか、冷静に言った。

イギリス「と言うか、何かあったんじゃないか？」

中国「こんな場所であるか？ロシアの挑発にでも乗ったんじゃないか？あるか？」

イギリス「しょうがねえな。あいつら割と本気でじゃれ合うからなあ……」

中国「いや…じゃれてるのはまた違う気がするある。とにかく、フランスと合流して見に行くよろし。」

イギリス「っはぁ〜！しょうがねえな〜！！」

イギリスは大きなため息をつき、フランスと合流するために2階に戻ろうと部屋から出ようとした。しかし…

イギリス「ん？何だこの紙？」

イギリスは赤い椅子の近くに落ちている紙に気づき、拾い上げた。

イギリス「なにになに？」

「ピアノは奏でる鍵へのコード、鍵は開くよタルタロスの戸」

…どういう意味だ？」

紙には先程のレバー横の紙と同じように不可解な言葉が記されていた。ただ、先程の紙とは違っていたのは…

中国「何あるか？このマーク。」

紙の最後に黒い羽根と白い羽根で作られた十字架のマークが入っていた。

イギリス「…一応持っていくか。」

イギリスは紙をポケットに仕舞った。
二人は4階を後にした。

スツ（ホワイトが姿を現す音）

ホワイト『ふう〜。ギリギリセーフ！危なく時間切れになるところだったよ。』

ホワイトはほんの数秒前まで「トランスペアレント」という魔法で透明になり、赤い椅子の後ろに隠れていた。

ホワイト『「ヒント」を書いた紙にも気づいてくれたし…ま、良かった良かった。』

先程の紙はホワイトと黒羽が用意したものだった。

ホワイト『ほんじゃま、もう少しイギギとにーを見守っておきま
すか』

…形はあれど姿は見えず、触れこそすねやはり姿は見えぬ……トリスペアレント！』

ホワイトは呪文を唱えると透明になった。

そしてイギリスと中国の後を追いつ、3階に降りていった。

第五話 イギリスと中国の探索（後書き）

次話はイギリス・中国がフランスと合流するために2階へ行く話です。

第六話 イギリスと中国 ～2階にて～ (前書き)

イギリスと中国が2階であれこれ話す話です。

今度は黒羽もホワイトも出てきます!…少しだけですが…

第六話 イギリスと中国 ～2階にて～

2階

イギリス「15分か…。」

二人が2階に着いてから15分が経った。

イギリス「……フランスのやつ、来ないぞ?」

でも、フランスは姿を現さない。

中国「どういうことあるか? 2階なんかすぐに見終わるはずある。」

イギリス「待つのに飽きてとつと下に行ったんだろ?」

イギリスは半ば呆れるように言った。

中国「……まあ、確かに飽きる要素はあるね。入れ違いになると面倒あるから、軽く2階の部屋覗いてくるある。お前はここで待つてるよろしー!」

イギリス「そうだな。入れ違いになるとまた面倒だ。」

イギリスは階段下で待機し、中国は2階の部屋いくつかが覗いた。そして例の異臭のする部屋に来た。

中国「薪を燃やした跡……あるか。異臭はこれが原因あるね。」

中国は納得するように暖炉を見た。

中国「……………」。

暖炉の中をじっと見つめる中国。

中国「……………は？」

中国は暖炉の中に【あるもの】を見つけ固まった。

中国「これ、もしかしくなくても……日本の服、ある。」

中国は半分焼けた日本の服を暖炉から取り出した。

中国「な、なんでこんなに血の跡がついてるある……。暖炉の中……色んな物が燃えた跡があるね。でも、何を燃やしたのか分からねえあ

る。」

中国は日本の服を持って階段下にいるイギリスのところへ急いだ。

イギリス「どうだった？いたか？」

中国「……………」。

イギリス「お前…顔真っ青じゃないか！な、何持ってるんだよ…」

中国「に…………日本の服ある…………。半分は燃えてしまったあるが…………。」

中国はイギリスに見つけた日本の服を震える手で見せた。

イギリス「これ…血、だよな？え？日本の服って…………まさかアイツ等…………！」

イギリスも顔を青くしながら叫んだ。

中国「ここは危険ある！でも、日本がいるんなら話は違うあるね！
我は日本を探してから帰るある…………！」

中国は「弟がいるなら話は別だ」と声を裏返して叫ぶ様にイギリ

スに言い放った。

イギリス「お、落ち着けつて！冷静に考えてみるよ！何で日本がここに来ているんだよ。」

イギリスは何とか取り乱している中国を落ち着かせようとした。

イギリス「いいか？俺達は、アメリカのアホな話に乗って面倒だけど暇つぶしがてらに来たんだぞ？」

中国「だから何がおかしいあるか！」

痺れを切らした様に中国はイギリスに怒鳴った。

イギリス「お前言ったよな？日本にメールを送ったつて。日本と直接世界会議の会場で話した時、あいつは『善処します。』つって、いつも通りめんどくせえ！とか思ってた来なかった。

で、この館の中に入る時に『今着いた』つてメール送って、あいつから『気をつけてください』つて返事が一度だけ来たたる。でもそれは、日本が【世界会議の会場】から送ったんだぞ！？」

中国「！あ……。」

中国はイギリスの話の聞き、日本がこの場にいる事は有り得ない

と分かったようだった。

イギリス「ちゃんと考える。あいつは今、世界会議の会場にいる！俺等より先に来ていることは「有り得ない」んだ。」

中国「じゃ、じゃあこれは何あるか！この服は、日本が今日着ていたのと同じある！なんで同じ服が、真新しい状態で暖炉の中で燃えていたあるか！」

中国は日本の服を強く握り締め、イギリスに言い放った。

イギリス「それは……」

理由が思い付かず、さすがにイギリスも言葉を詰まらせた。

中国「フランスもいねえある。アメリカは何か発砲していたある。ここはおかしすぎるね！我、皆に相談してくるある。」

イギリス「分かった。とにかく戻ろうぜ。日本のだって可能性は………確かに絶対とは言えねえかもしれん。」

二人は珍しく意見を揃えると他のメンバーが居るはずの1階へ向かった。

スツ（ホワイトが姿を現す音）

ホワイトはポケットから大きさ6cm、楕円形の銀色の石を取り出した。

ホワイト『もしもし黒羽、聞こえる？』

黒羽『…もしもし、ホワイト？聞こえるよ。』

石からは紅い光が出てきて、紅い光からは黒羽の声が聞こえてきた。

ホワイト『イギギと1に、1階に行ったから。』

黒羽『そうなの？…分かった。ロシアさんとカナダさんは【あいつ】と交戦中だよ。なんとか戦えてるけど、ちょっと危なそう。』

ホワイト『そっか。…あ、ヒントの紙はちゃんと二人の手に渡ったよ……解読はできてなかったけどね。』

黒羽『はは…やっぱり解読はカナダさんに任せないといけないね。』

ホワイト『カーナーン！カーナーン！！』

ホワイトはとても楽しそうにコールした。

黒羽『あ…イギリスさん達が来たみたいだから、通信切るね。』

ホワイト『OK …黒羽、気を付けてね。』

黒羽『うん！大丈夫だよ。』

ホワイト『じゃあ…また後で』

黒羽『また後で。』

スー…

紅い光は空気に溶けるようにして、消えてしまった。

ホワイトは石をポケットに仕舞い、後で落ち合う予定になっていた。ピアノの部屋へと、トニー(?)を警戒しながら向かうのだった。

第六話 イギリスと中国 〓2階にて〓 (後書き)

次話は1階でイギリス・中国・ロシア・カナダ・日本が集まる話の予定です。

感想、評価お願いします！

第七話 合流、そして戦闘（前書き）

イギリス・中国・ロシア・カナダがトニーもどきと戦います。

黒羽とホワイトは出ません。

第七話 合流、そして戦闘

1階

イギリスと中国は1階に降りて、廊下を左に進んだ。
まず、進んですぐにあった部屋に入った。

ガチャッ

中国「また図書室あるか？」

イギリス「アメリカ達は……いねえみてえだな。他の部屋を探すか
……。」

二人は図書室を後にし、奥の部屋に入った。

ガチャッ

イギリス「！うわっ！！なっ！え？はあ！？」

中国「っ！！な、なにあるかあの化け物！！」

部屋に入ると、灰色の巨大な化け物：トニー（？）がロシアとカ

ナダを襲っていた。

ロシア「やあ。二人共遅かったね。見ての通り、襲われ中みたい。」

カナダ「おお二人共……に、にげ……逃げた方が……」

ロシアは後ろにカナダを庇いながら、いつものようにニコニコとイギリス・中国に話し掛けた。

カナダはロシアの後ろでトニー(?)に怯えていた。

ガッ!!

カナダ「!ロツ……ロシアさん!!」

トニー(?)は一瞬でロシアに迫り、攻撃を仕掛けてきた。

ロシア「………たいなあ。やっぱりこんな所にある水道管じゃ全然ダメだね。最初から自分のにしておけばよかったよ。」

そう言つとロシアは水道管を取り出した。

カナダ「む、無理ですって!自分のって言っても、ただの蛇口です

よ!？」

カナダはロシアの後ろから必死になって訴えた。が…

ザッ!!

中国「はあああ!?!?なんでただの水道管が剣になってるある!！」

ロシアの水道管は剣になり、トニー(?)にダメージを与えていた。

トニー(?)はロシアの攻撃にわずかだが怯み、後ろに下がった。

ロシア「あは。実はこれ、仕込み刀なんだよね。日本君にお願いして、作ってもらっちゃった!！」

再び目の前に迫るトニー(?)を尻目にロシアはニコニコと笑顔で中国の問いに答えた。

ロシア「だからさあ……切れ味がすごいんだよね!！」

ズバッ!!グシャッ!!ザクッ!!

ロシアは笑顔のまま迫っていたトニー（？）を連続で切りつけた。トニー（？）は後ろの壁へ吹っ飛んだ。

中国「うわっ！！えげつねえある！」

カナダ「でも全然ダメージが…」

顔を引き吊らせる中国、弱々しく言葉を発するカナダ。

確かにカナダの言う通りトニー（？）はあまりダメージを受けていないようだ。

イギリス「と、とりあえず加勢するぞ。」

中国「わかたある。」

イギリスと中国もロシアとカナダに加勢し、トニー（？）に攻撃を始めた。

カナダ「えいつ！」

中国「アチョー！」

ヒュンッ

ザクッ

カナダは矢でトニー（？）を射て、中国は太極剣でトニー（？）を切りつけた。

イギリス「……ハアッ！」

パンッ

イギリスも魔法で攻撃する。

トニー（？）「……コフレロ……」

しかし皆の攻撃は効いていないようで今度はトニー（？）が攻撃を仕掛けてきた。

全員「……ッ!?!?!」

皆、大ダメージを受けてしまった。

ロシア「大丈夫？中国君。これ食べて回復して。」

中国「…かたじけねえある。」

ロシアは中国におにぎりをあげた。

中国「よし、行くあるよ…。」

ホアチャー！アタタター！！」

中国は太極拳でトニー（？）に連続攻撃をした。

ロシア「うふふ…。」

ザクツ　ズバツ

ロシアもそれに続く。

.....

.....

.....

…

カナダ「っ……………はぁ……………はぁ」

ロシア「あーあー。本当、やんなっちゃうね。全然効かないじゃない。」

その後しばらく戦闘は続いたが、あまりトニー(?)にダメージを与えることはできてなかった。

中国「イギリス！お前なんで全然役にたたねえある！」

そう、四人の中で一番トニー(?)にダメージを与えられてなかったのはイギリスであった。

イギリス「いや、その……………スマン。なんかこの空間自体が、魔力を封じてるのか全然、一部の力しか使えねえみたいだ…」

イギリスは中国に謝った。

中国「厄介な場所ある！我もう力でねえある……………」

中国だけでなく、他の三人も疲れを感じていた。

ザッ　ザッ　ザッ

イギリス「え、ちょ…」

トニー（？）がイギリスに迫る。イギリスは疲労のため、動くことができない。

トニー（？）が腕を振り上げた。その時…

??「斬!」

何者かが上から降ってきてトニー（？）に攻撃を仕掛けた。

第七話 合流、そして戦闘（後書き）

戦闘シーン、ハシヨってすみません。

感想・評価お願いします。

第八話 助っ人登場！（前書き）

前話は中途半端に終わったので、その続きです。

黒羽とホワイトは出ます。

第八話 助っ人登場！

日本「困るんですよ。私の友人に手を出すのは。」

イギリス「え！？に、日本か！？」

たった今、上から降ってきたのはここに居るはずの無い日本だった。

日本「これは皆さんお揃いで。しかし、話はもう少々後でお願いします。」

中国「日本ある！ー！やっぱりここに来てたあるか！ー！」

中国は日本に会え、また日本の安否が確認でき嬉しそうに名前を呼んだ。

日本「ご無事ですね？恐れ入りますが、コレの処理は私にお任せを。」

カナダ「で、でもあれすごく強くて…」

ロシア「手伝うけど？」

先程戦い、自分達では全く歯が立たなかった相手を独りで倒そうとする日本にカナダとロシアが声を掛けた。

日本「心配無用です。」

日本はロシアの誘いを断った。

日本は皆の傷を見て、僅かに目を細めた。

日本「……………随分と暴れましたね。これだけ傷を負わせるとは、私も少々本気でかからせていただきます。」

日本にしては珍しく、声を低くし怒りを露にした。

日本「…怒りの発散相手には、丁度いい!!」

怒りの一刃…遺憾の意!!」

ゴゴゴゴゴゴ…

ドガアアアアン!!

日本はトニー(?)を一刀両断した。

トニー（？）「グギャアアアー！」

スー……

トニー（？）は断末魔の悲鳴をあげると、消えてしまった。

ロシア「わ。カナダ君みたいになっちゃった。」

カナダ「普通に消えたって言って下さい。」

ロシアの言葉に困ったように突っ込みカナダ。

日本「立てますか？イギリスさん。」

日本が座り込んでいるイギリスに手を差し伸べる。

イギリス「お、おう。それにしても日本、あの化け物との戦いになり慣れてないか？初めて……じゃないとか。」

日本「え。何をおっしゃるんですか？皆様も、慣れていらっしやるでしょ？ここに来たのは、貴方方が先ですし」

日本はイギリスの言葉に怪訝な顔をした。

中国「我達は、ここに来てまだ1時間ちょっとある。日本来ているはずは…ないのが普通あるが。」

ロシア「そう言われてみればそうだね。だって中国君、日本君にメール送ってたし世界会議の会場から日本君も返事したよね？」

日本「はい。それで、イタリア君が「俺も行きたい」って言い出したので、ドイツさんやプロイセンさんと一緒に、ここに来たのです……が……」

日本は言いながら首をひねらせる。他の四人も同様に首をひねった。

カナダ「え？でも会場からココまでって、3時間はかかってしまいますよ？僕達、本当に1時間ちょっとしかないしなんかおかしくありませんか？」

どうにも話が噛み合わない。

日本「……色々と、お話しなくてはいけませんね。一先ず、二階に行きましょう。今のところ、安全な部屋があります。」

そう言って歩き始めようとした日本に、中国が日本の燃えた服を

見せながら日本を止めた。

中国「ちょ、ちょっと待つある！！そしたらコレ！！この日本の服は何あるか？血だらけある！！」

それを見た日本は動きを止めて答えた。

日本「おや。それは暖炉に投げ入れた私の服ですね。何故中国さんが？」

中国「あの部屋に行ったら見つけたある！怪我…したんじゃ…」

日本「あの、それ……トマト…です」

日本は言いづらそうに苦笑いしながら答えた。

中国「……………は？」

思考回路が停止する中国。

日本「大丈夫ですよ。どこも怪我していません。さ。ドイツさんとイタリア君とも合流して事情を説明します。」

そして五人は台所を後にしようとした。しかし

?? 『紡ぎしは平穩、痛み忘るる光の奇跡に名を与つる…ハート
レスサークル!』

全員「!?!」

台所を立ち去ろうとした五人の足元に桜色の円陣が現れた。
円陣は3秒程光ると消えてしまった。

イギリス「なっ!?!」

カナダ「えっ…。」

ロシア「傷が…。」

中国「治ってるある!?!」

日本「……………」

光が消えると皆の傷はすっかり治っていた。中にはひどい傷もあったが、それもつつすらと跡が残る程度になっていた。

皆が騒ぐ中、日本だけは顎に手をやり何か考え込んでいた。

中国「どうしたあるか？日本。」

皆も日本の様子に気付き、日本へと視線が集まる。

日本「……また、だと思ひまして。」

ロシア「また？」

ロシアの問いに日本は「はい」と答え、話し始めた。

日本「実は先程の声を私とイタリア君、ドイツさんは何度か聞いています。…大体はさつきみたいに戦闘の後に不思議な桜色の光が現れ、傷を癒してくれたんです。あと、たまに戦闘中にあの声で歌が聴こえてきました。」

イギリス「歌？」

日本「はい。」

訝しげな顔をして聞くイギリスに日本が頷く。

カナダ「！あ、あの…」

カナダが小さく手を挙げた。

ロシア「どうしたの？カナダ君。」

カナダ「えっと、その……さっきの声の子は大丈夫なんでしょうか？」

三人「あっ！！」

確かにこの館は危険だ。もし独りで居るときにあの化け物に遭遇したら…

日本「…恐らく大丈夫だと思いますよ。」

四人「えっ！？」

イギリス「何でだ？」

「心配ない」と断言する日本にイギリスが問う。

日本「イタリア君が館に入ってすぐに二人の少女に出会ったらしいんですが、二人とも武器を持っていてさっきの【あれ】と対等に戦っていたらしいです。」

イギリス「そう、か…。」

中国「でもやっぱり危険ある！！探した方がいいんじゃないかねえあるか？」

日本「ええ。私達も出来れば彼女達と合流したいと思っています。……ではそろそろ行きますか。イタリア君達が待っています。」

ロシア「じゃあ、移動しながらその子達を探そうか。」

ロシアの言葉に皆頷き、今度こそ本当に五人は台所を後にした。

3階 ピアノ部屋

フォン……

ピアノがある真っ白な部屋に突然、淡紫色の光が現れた。

ホワイト「おっ」

ホワイトは顔をあげ、嬉しそうな声を出した。

黒羽「お待ちせ。」

ピアノの前に現れた淡紫色の光が消えると、そこには黒羽が立っていた。

黒羽はテレポーターションで台所からピアノ部屋まで2秒でやって来た。

ホワイト「お疲れ、どうだった？」

黒羽「ちゃんと原作通りに進んでるみたい。」

ホワイト「そ。」

黒羽にピアノの近くに座り、武器（現在は槍）の整備をしていたホワイトの隣に座りながら答えた。

黒羽「あ…そう言えば…」

ホワイト『ん？』

黒羽『皆さん、私達のこと探してるみたい…（苦笑）』

黒羽は苦笑しながらホワイトに現状を伝えた。

ホワイト『あー…まあ、あんなだけ干渉してたらそうなるか』

黒羽『ごめんね、私のせいで…』

黒羽はうつむきホワイトに謝った。

ホワイト『いやいや、黒羽は何にも悪くないよ。…むしろ「皆の傷を癒す」とか「戦いのサポートをする」みたいな良いことしかしてないじゃん』

黒羽『……………』

黒羽はうつむいたままだ。

ホワイト『…も〜だからさー！』

黒羽『？』

ホワイトは武器を足下に置き、右手をゆっくりと黒羽の頭の上に持ってきた。

ポンッ

なでなで

ホワイト『黒羽は今まで通り、自分が助けたい時に皆を助けられればいいの！！分かった？』

ホワイトは黒羽の頭を撫で、グイッと黒羽の顔を覗き込んだ。

黒羽『（キョトン）…ふふ…ありがとう、ホワイト。』

黒羽は額をコツンとホワイトの額に当てた。

ホワイト『エへへ…』

ホワイトも額をグリグリと黒羽の額に押し付ける。

ホワイト『よーし！！頑張って皆を脱出させるぞ！！』

黒羽『うん、そうだね。』

ホワイト『あつ、勿論僕たちも脱出するからね』

黒羽『……うん。』

『頑張るぞー！』と叫びながら部屋を走り回るホワイトを黒羽は眩しそうに、でもどこか儂げに見つめていた。

第八話 助っ人登場！（後書き）

感想・評価お願いします！！

第九話 緊急会議 ～ 枢軸組の報告～（前書き）

現在揃っているメンバーが暖炉の部屋にて会議をします。

第九話 緊急会議 ー 枢軸組の報告 ー

2階 鉄の扉の部屋

ドイツが籠もっている鉄の扉がある部屋でイタリアが待っていた。日本はイタリアに現在の状態を簡単に説明した。

イタリア「え？他の皆も来てるんだ！じゃあまた暖炉の部屋に戻るっか！」

日本「はい。若干数名足りないのですが、詳しくは今から緊急会議、ということば。」

ドイツはと言うと、鉄の扉の中でカンカンと機械音を響かせていた。

日本「ドイツさん。準備が出来たら行きましょう。皆さん、お待ちかねです。」

ドイツ「了解した」

鉄の扉が重々しい音を立て開いた。
ドイツが中から出てくる。

ドイツ「待たせてすまなかつたな。」

イタリア「ヴェー。もう大丈夫？まだ入ってる？」

イタリアは疲れた顔をして扉から出てきたドイツに心配そうな声を出す。

ドイツ「いや。もういい。それに恐らく、ここにはもう来ないはずだ。むしろ、来ないことを願う」

ドイツは意味深な言葉を呟いた。

日本「そうですね。期待しています。では急ぎましょう。こちらも悠長にできません。一刻も早く、情報をまとめなくては。」

日本はドイツの言葉をあまり気かけず、二人に声を掛けた。
ドイツが辺りをチラッと見回し、俯く。

ドイツ「やはり兄さんは見つからなかったのか…。」
日本「……はい。」

日本も申し訳なさそうに答え、俯いた。

イタリア「だ、大丈夫だよ！！元気だそうよドイツ！ドイツがそんなじゃプロイセンも出るに出て来れないよ！」

珍しくイタリアがドイツを励ます。

イタリアの一生懸命な姿にドイツは頬笑んだ。

ドイツ「そうだな。すまん。」

重い空気が僅かに和んだ。

日本「行きましょう。皆さん、お待ちかねです」

日本に促され、ドイツ・イタリアは日本と共に部屋を後にした。

2階 暖炉のある部屋

現在、この部屋には行方不明のメンバー以外の全員が揃っている。

日本「お待ちせしました。では早速ですが、私達の現状の説明からさせていただきます。」

皆のいる場所は

イタリア・ドイツ…暖炉のそば

日本…テーブルの前

ロシア・中国…日本と向かい合っている

イギリス…日本の右隣

カナダ…日本の左隣

という状態である。

日本は早速、自分達の現状を連合組に話始めた。

日本「まず私達は、ご存知の通り中国さんがこの館に来た。というメールをいただきイタリア君も面白いから行ってみたいと言う事で私と、ドイツさん、イタリア君、プロイセンさんでここに来ました。私はずの中の様子を歩いて回ったのですがその間に、先ほどの化け物が現れてイタリア君達に襲い掛かったんです。」

イギリス「だ、大丈夫だったのかよ。」

日本の話を聞き、イギリスが顔をひきつらせる。

イタリア「うん。なんとかね。運がいいのか悪いのか、逃げ足の速い俺をターゲットにしたみたいでとりあえずは撒けたよ。」

中国「逃げ切ったあるか！すげえあるな。」

イタリア「エへへ…。」

中国に誉められ、イタリアは嬉しそうに笑う。

ドイツ「その時にお前は「二人の少女」と出会ったんだな？」

イタリア「うん。黒髪に瑠璃色の瞳の女の子と白髪に緋色の瞳の女の子に会ったよ。でね、白髪の女の子が『ここは私達に任せて逃げてください。』って言ったんだ。」

ロシア「へへ、それで逃げたの？」

イタリア「本当は色々聞きたかったんだよ！でも、白髪の女の子がその…イギリスみたいに変な魔法使って、体が勝手に動いちゃったんだ…。」

イギリス「変な何だ！変な何だ！！」

イタリア「ヴェー！？」

イギリスに怒鳴られイタリアがビクツとする。

カナダ「じゃあ、僕たちの怪我を治してくれたのはその白髪の女の子…ということでしょうか？」

カナダはイタリアの話の聞き、思い付いた仮説を口にした。

イタリア「分かんない…けどその子、自分達は俺達の味方だって言ってたよ。」

イギリス「さあ？どうだかな。」

日本「……ひとまずイタリア君の会った少女達のこととは後で考えることにしましょう。…結局、あの正体は分からないままなんとか全員とうまく合流することができてこの部屋の鍵がある、という安心感からここで一夜を過ごしました。」

ロシア「一夜……。」

カナダ「や、やっぱりおかしいよ……。だって僕達……あ、ごめんなさい。話、続けて下さい。」

日本の話と自分達の現状にはやはり、大きな「ズレ」があり、ロシア達はそれが信じられなかった。

イタリア「燃やすのなくなってきたね。この木箱、燃やしてもいい

かな？」

ドイツ「そうだな。燃料になるなら燃やしてしまおう」

暖炉の傍で火を見ていたイタリアが、拾った木箱を暖炉に投げ入れる。

炎は再びメラメラと燃え上がる。

日本「見張りを置こうということになりプロイセンさんが快く引き受けて下さったのですが、安心感からか三人とも相当深い眠りに落ちてしまいました…。」

日本は俯き、申し訳なさそうな顔をした。

日本「起きてみたら…プロイセンさんはいなくなっていました。廊下に血痕が落ちていたので跡を辿ったのですが…途中で…。」

ロシア「辿れなくなっちゃったんだ…。」

ロシアの言葉に日本は頷いた。

イタリア「日本を中心に探してみただけどまた誰かが欠けたりするの嫌だ…ってなって俺とドイツは待機していたんだ。そしたら、日本が皆と会ったってことだよな？」

日本「はい。私達の経過は以上です。てっきり……アメリカさんとフランスさんもいると思ったのですが？」

今度はイギリス達、連合組がこれまでの話を話し始めた。

第九話 緊急会議 〱 枢軸組の報告〱 (後書き)

次話は連合組の報告です。

第十話 緊急会議 ～連合組の報告～（前書き）

予告通り連合組の報告です。

第十話 緊急会議 ～連合組の報告～

枢軸組の報告が終わり、次は連合組が報告を始めた。

イギリス「そうだ。俺達6人は、アメリカの提案でここに来て、俺と中国とフランスが2階。アメリカとロシアとカナダが1階を見て回るってことで二手に分かれた。」

中国「2階に上がった瞬間、あまりいい感じがしねえあるから、我とあへんは3階と4階を適当に見て回ったある。」

中国がイギリスの言葉を引き継ぎ、イギリスも確認するように話を聞きながら頷く。

中国「全部見終わって2階に下りてきたらフランスがいなくなっていて、この部屋には日本の服が燃やされてどうなってあるか！ってことで。」

イギリス「1階に戻ったら、ロシア達が例のアレと交戦中だったってことだ。ちょっとした隙に、あの野郎消えちまいやがった。」

日本「そうでしたか。」

あの、私何度か戦っているうちに薄々気づいたのですが、あの得体の知れない生き物って…。」

困った顔をして、言葉を詰まらせる日本。

ドイツも同じことを思っていたのか、今度はドイツが日本の言葉を引き継いだ。

ドイツ「アメリカが友人だと言っていたのに似ているな。」

その言葉に中国も大きく頷き、賛同する。

中国「そうある！！見てピンときたあるよ！あれ絶対そうある！！えーと…名前が…。」

ドイツ「ト…トミー？と言ったか？」

イギリス「ああ、確かにそんな名前だった。姿形そっくりじゃないか。アメリカの仕業じゃねえの？ここの噂を聞いて誘ってきたのもアイツだしよ。」

イタリアはそれを聞き、顔をパツと明るくした。

イタリア「そつか！！じゃあ、アメリカの度が過ぎたイタズラってことだよね！だったら話は早いじゃんっ！アメリカ見つけてさ！」

イタリアが皆の顔を見ながら提案する。だが

カナダ「違います。」

少女達の話の後からずっと黙っていたカナダが、はっきりと否定の言葉を口にした。

イギリス「は？」

イギリスはカナダの言葉に眉をひそめる。

カナダ「あれは、トニーではありません。」

カナダ「あれは、トニーではありません。」

もう一度、カナダははっきりと同じ言葉を繰り返す。

ロシア「僕達もね、1階を回ろうって話になった時出たんだよ。アレ。でも出てきた瞬間、すぐ気づいたよ。アメリカ君が前に紹介してた友達だなんて。」

日本「え、ええ。違うんですか？私達、アメリカさんの友人だと言う事で結論付けて気楽に探すつもりで……。」

カナダは首を横に振ってまた否定した。

カナダ「僕は家も近いし、何度かトニーには会ってます。見た目は確かに似ているかもしれませんが。でももしそうだとしても…襲ったりはしません。」

中国「おそ……え？アイツに攻撃してきたあるか！」

カナダとロシア以外の全員が、驚愕の表情を浮かべる。

カナダ「一撃でした。壁まで吹っ飛んでしまって、でも意識はなん

とかあるみたいで、銃で戦ったんですけど全然利かなくて……。」

ロシア「僕達、彼の友達が出てきたって思ってたのにいきなり襲われて、冗談にしてはアメリカ君、本気で戦ってたし…これたぶん違うんじゃないかって気づいてね。」

二人の言葉にイギリスと中国は4階で聞いた銃声を思い出した。

イギリス「あの銃撃音……それだったのか！」

ロシアはイギリスを見て頷く。

ロシア「どうすればいいのか分からなくてさ。彼、どんどん追い詰められていってなんとかしようと思ったら……階段から飛び降りてきたんだ、黒髪の女の子が。」

全員（カナダ除く）「……え?」「」

イタリア（黒髪の女の子……。）

ロシアの言葉に皆、呆然とする。

イタリアの脳裏に自分が出会った黒髪に瑠璃色の瞳の少女の姿が浮かぶ。

ロシア「ね、カナダ君。」

カナダ「は、はい。その子、刀で【あれ】に斬りかかって僕たちに『ここは僕に任せてあんちゃん達は逃げて』って言ったんです。」

ロシアの言葉をカナダは肯定し、話し始めた。

ロシア「アメリカ君とも一緒に逃げようと思ったんだけど」「ここは俺に任せて逃げる!!」って。」

カナダ「それで僕たち、一旦その場から離れたんですけどやっぱりアメリカが心配で、すぐに引き返したんです。でも……」

ロシア「戻って来たらアメリカ君も女の子も化け物も消えてたんだ。」

全員「……………」

皆、黙りこみどろいことか理解しようとした。と、イギリスがハツとしたように顔を上げた。

イギリス「おい！もしかしてそいつらがアメリカ達を拐ったんじゃない？？」「違ってますの!!」「!？」

全員「!？」（バツ）」

その場に居た全員が反射的に各々の武器を構え、声のした方を一斉に見た。そこには…

??「ご主人様達はそんなことしてないんですの!!」

大きさ30cm。オレンジ色のリングを体に着けており、イソギンチャクみたいな形の大きな耳を持つ、水色と白の体毛の獣が居た。

第十話 緊急会議 ー 連合組の報告 ー (後書き)

変な終わり方してすみません。

【水色の獣】が何か分かりますか？
分かる人には分かるかもしれません (^| ^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8761y/>

ヘタ鬼 ~トリップ!!皆で脱出しようね。~

2011年12月11日13時59分発行